

[研究ノート]

ケインズとスミス——決疑論批判序説—— Keynes and Smith in the Criticism of Casuistry

伊藤 哲

Satoshi Ito

Abstract *I intend to insist that both Keynes and Smith considered the common respect of Economics as one of Social Science. Keynes stated that Economics was one of Moral Science, as Smith pointed out the difference between Moral philosophy and Natural philosophy. However, Hume emphasized Moral philosophy should adopted Newton's experimental method in the analysis of human nature. Keynes doubted whether human acts were based on Mathematical expectation, and indicated the instability due to the characteristic of human nature. Equally Smith submitted that the casuists made mistakes their end for the rules of justice. Criticizing Casuistry, Keynes and Smith recognized that Economics connoted the insecurity of human nature which created social dynamics.*

キーワード モラル・サイエンス、決疑論、道徳哲学、自然哲学、確率、数学的期待値、経済学

学際領域 経済思想、経済学史、社会思想史

はじめに——「新しいモラル・サイエンス」とは

ケインズの訃報（1946年4月21日死去）に寄せて、当時の国際的哲学雑誌『マインド』は彼への追悼文の中で、次のように述べる。「ケインズにとっては、経済学はつねに、「精神科学（moral science）」の一分野であった。彼は数学的な技術が有用であればそれを用いたけれども、数学は良き従者であって悪しき主人公である、という信念を持ち続けた。そして、経済学は抽象的な演繹的な体系ではなく、人間の社会的な幸福の一つの側面に関わる科学である、という立場を守り続けた。（中略）ケインズは、ケンブリッジの環境の中に生まれ、そこでモラル・サイエンティストとして育まれた。」¹⁾

また、ケインズ自らハロッド宛ての書簡の中で経済学を論理学の一分野に位置づけ、さらに、経済学は「精神科学」であって自然科学ではない旨を表明している。「私が思うには、経済学は論理学の一分野である。しかし、あなたは、それを疑似的な自然科学としてしまうことに、十分に確固とした拒否を示していないように思われる。……経済学とは、現代社会に関連をもつ、様々なモデルを選択する技術と

結びついた、モデルを用いた思考の科学である。それがそうでしかありえないのは、経済学が典型的な自然科学とは異なって、多くの面で時間を通じて斉一的ではない事実を扱わなければならないからである。……経済学は本質的に精神科学であって、自然科学ではない。』²⁾

『ケインズの哲学』³⁾を著した伊藤邦武氏は、本書の「結び」のタイトルを「新しいモラル・サイエンティスト」としている。筆者は、ウトゲンシュタインの論理学とケインズの思想の間に密接な結びつきがあり、「精神科学のヴィジョンが共有されている」旨を指摘して、さらに、ウトゲンシュタインの影響の下、ケインズの初期の論文『確率論』と彼のあまりにも有名な『雇用、利子および貨幣の一般理論』の思考的方法の差異性を指摘するとともに、ケインズがケンブリッジの哲学から飛翔した旨を提示している。伊藤氏は次のように述べる。『『確率論』において不確実性と合理性との結びつきを命題の世界にさぐるうとしたケインズは、十数年後には、この超越的世界を離れて、貨幣が構造化しようとする経済世界のうちなる「不安」と「規約」との結びつきを、内側から解明し、その不合理性の危険を洞察するという「思考の科学」を考案した。それは論理的分析というものを、現実の人間世界の生きた論理の理解の仲介として解釈する、新しいモラル・サイエンスの誕生であった。』⁴⁾その後で、伊藤氏は18世紀におけるヒュームやリードが行った自然科学的実験的手法を精神科学に導入するという試みは、ケインズによっては掲げられていないことを指摘し、彼が示した思考の科学こそ、「新しいモラル・サイエンス」であることが主張されている。

拙論では、「新しいモラル・サイエンス」へのささやかな考察を、18世紀の思想史の上で、今一度、検討し、ケインズが構築したといわれる「新しいモラル・サイエンス」の基礎的思想の抽出への試みを行いたい。これを進める上で、まず、われわれはケインズに大きな哲学的インパクトを与え、彼自身が批判の対象として取り上げたこともあるヒュームの言葉の議論から始め、同時代人であるスミスの道徳哲学と自然哲学への言及とともに、ケインズの間人考察を通してとスミスとの思想基盤の共通性——決疑論批判——をわずかなりとも指摘したい。

1. ヒュームにおける道徳哲学の自然哲学的手法の導入への試み

ヒュームは『道徳原理の研究』の付録「若干の言葉上の議論について」で、次のように同時代の哲学者を批判している。「哲学者達が、最も深い関心をもたれる論争を取り扱っていると自らが想像するときに、実は、法学者の領域に侵入して言葉上の議論に従事しているに過ぎない場合がごく普通である」⁵⁾と述べて、ヒューム自らこの際限のない言い争いを終結させるために、人物の価値を形成している心的諸性質あるいはそれを損なうような「諸性質の目録の収集を企て」ることを示唆している。また、ヒュームは同個所で、近代の哲学者達の自らの道徳研究が密接に神学と関係していることを指摘し、神学の学問的性格を次のように示す。「妥協のい

かなる条件をも認めず、自然の現象または心の偏見のない感情にあまり重きをおかずに、知識のあらゆる部門を自己自身の目的に従わせるので、そのために推論および言語でさえ、それらの自然の経路から逸らされ、対象の相違がある意味では知覚されない場合にも、区別を確立しようとする努力がなされてきた⁶⁾としたうえで、「哲学者のふりをした聖職者達」があらゆる道徳を民法と同様の原理基盤の上に置いた旨をヒュームは批判している。このことは、中世から連綿と継承されてきた決疑論への批判という色彩が非常に強い。まさに、当時の聖職者が用語や対象の名称によって是認と否認の諸性質を規定し、判断していたといえる。このとき、ヒュームは、「言葉の名称よりも事物に注目する方がはるかに重要である」⁷⁾と指摘する。

しかしながら、ヒュームは道徳哲学 (moral philosophy) と数学的諸科学 (the mathematical sciences) の明証性の差異について触れる個所で、後者の数学的諸科学を評価し、後者はつねに用語と観念は同一であり、明晰であり確定的であるが、前者、すなわち道徳的諸科学は「観念の曖昧さと用語の不明確さ」があり、このことがこの科学の進歩を妨げている旨を指摘する⁸⁾。その障害を取り除くために、ヒュームは幾何学や物理学に比して進歩が遅い道徳哲学に対して、次のように主張する。「形而上学に出てくる諸観念の中で、われわれの研究の全般を通じて取り上げる必要のある力、勢力、エネルギーあるいは必然的結合等の諸観念ほど、曖昧または不確実なものはない。したがって、われわれはこの章において、できればこれらの用語の厳密な意味を確定し、それによってこの種の哲学において、これほど苦情的とされる曖昧さの幾分かを除くように努める。」⁹⁾

また、同書第5章「これらの疑念の懐疑主義的解釈」では、「確信 (belief)」を定義づけるときにヒュームは、「この感情の定義を試みなければならないとすれば、われわれはおそらくそれが不可能ではないまでも、極めて困難な課題であることが分かるであろう」と断ったうえで、「確信とは、この気持ちに対する真の、そして適切な名称である。そしてその用語の意味の理解に困惑するものは誰ひとりいない。なぜなら、すべての人がその用語によって表現される感情をあらゆる瞬間に意識しているからである」¹⁰⁾と。

上述のことは、ヒュームにとって何を意味するのか。次のように捉えることも可能であろう。ヒュームは当時の哲学者たちの論争の中に言語の定義における曖昧さと不明瞭さを感じるとともに、彼らが無意図的で他の学問領域に侵入したり、また、他学問との密接な関係性の下に人間の心的諸性質やその作用、諸行為への用語や名称、その使用が混乱をきたしていることを憂えていたであろう。それが、ヒューム自らそれらの用語・名称の整理とそれらの目録作成や定義付けを行おうという企図に駆られることとなったと思われる。ヒュームはその作業の困難性と不確定性を意識してはいたが、彼自らの理論を展開していった。

われわれは『人性論』序論のヒュームの言説を想起しよう。「われわれは実験を最大限おこない、あらゆる結果を最も単純で最も少数の原因から説明し、できる限りすべての原理を普遍的なものにしなければならないが、経験を超えてはならないのである。」¹¹⁾また、『道徳原理の研究』第3章「正義について」では、次のように

表明することによって、「観念の曖昧さと用語の不明瞭さ」を克服し、人間行為における普遍的原理を究明しようと試みたといえる。「何らかの原理が、一つの事例において偉大な勢力と活力とを有することが判明した場合には、あらゆる相似する事例において同様の活力をそれに帰属させることは、哲学の規則および常識の規則にさえ完全に合致する。これこそニュートンの哲学的思考の主たる規則なのである。」¹²⁾

ヒュームのこの企ては成功したといえるのであろうか。次にスミスの各哲学体系へのアプローチと各々の特質をわずかなりとも考察の視野に入れよう。

2. スミスにおける道徳哲学と自然哲学の相異

スミスは哲学論集の「天文学史」において、人々が「驚異」を感じ、その不安感を取り除くために、精神の自然的機能である「想像力」の助けを借りることを強調している。「精神が異なる諸対象間に発見されうる類似を観察するのが好むという事は、明らかである。そうした観察によって、精神は、すべての観念を配列し、組織して、正しい種類と種目にそれらをおさめようと努める。」¹³⁾これがわれわれの「驚愕の本性」という感情や感覚の強烈な変化を和らげるのである。「想像力に自然にいわばひとりでに現れる多くの対象を思い出すことができれば、驚異は完全に止む」とスミスは述べている¹⁴⁾。

次に同論文の「哲学」がどのように位置づけられているかみてみよう。「哲学は自然の結合原理である。」¹⁵⁾「哲学は、これら〔孤立して先行するすべての事象と矛盾するようにみえる諸事象〕すべてのばらばらな対象を一緒にする見えない鎖を示すことによって、この不協和で支離滅裂な諸現象の混乱状態に、秩序を導入し、想像力が宇宙の大回転を眺めるときには、それ自体で最も快適で想像力の本性に最もふさわしい、平穏と落ち着きの調子を取り戻させようと努力する。」¹⁶⁾とくに社会の進歩につれて、「すべてのばらばらな対象を一緒にする見えない鎖を示す」学問＝哲学が社会的に重要な職業となることを『国富論』第1編第1章「分業について」の中でわれわれは承知している。「またいくつかの改善は、学者または思索家と呼ばれる人たちによって成し遂げられたのであって、彼らは、何事もせずにあらゆる事物を観察することを職業とし、したがってまた最も離れた、しかも異質のもの力をしばしば結合することができる人たちのなのである。」¹⁷⁾この『国富論』での分業に関わる機械類の発明や改善の内容は、「天文学史」の「想像上の機械」＝「体系」を想起させる。

「体系は、多くの点で機械に似ている。機械は、職人が必要とする種々の運動や効果を、現実結合するとともに遂行するために創られる、小さな体系である。体系は、すでに現実に遂行されている種々の運動や効果を、空想のなかで結合するために創案される想像上の機械である。」¹⁸⁾スミスは続けて、「最初の体系はいつでも最も複雑」であるが、その体系が最終的に「ひとつの大きな結合原理で十分である」ということが分かると述べる¹⁹⁾。体系は新しい発想の下に単純化・簡潔化さ

れていくのが窺われる。そこでの2体系としてスミスはデカルトとニュートンの天文学体系を提示し、まず、デカルトを「この独創的で空想的な哲学者」と述べ、彼は「あらゆる順序のうちで想像力に最も馴染んでいる順序で継起し、高速運動と自然的慣性という諸惑星のまとまらない両性質を結びつけ」²⁰⁾ ようとしたと述べる。一方、ニュートンにおいては、現実の現象観察が彼の確からしさを完全で具体的という尺度まで到達させたとして、「彼の体系は今や、すべての反対を押し去り、哲学においてこれまで確立された最も普遍的な帝国の獲得にまで至った」²¹⁾と指摘した。スミスは哲学体系が「単なる想像力の考案物」という枠組みを超えて、現実が引力の存在を証明したのである。このことは仮説が体系を支えるのではなく、事実が体系を築くと言えよう。

次にスミスの『道徳感情論』第6版第3部第2章より、彼の人間類型比較から道徳哲学と自然哲学の相異部分を垣間見よう。

その二者は次のとおりである。一方は「詩人たち」と表現されているが、一般的に文筆家などの人文社会系の人々、他方は「数学者たち」で代表される主に自然哲学系の人々である。それをまた、スミスは次のような学芸分野に区分する。前者は、「卓越の程度が趣味の一定の繊細さによってのみ決定される」「若干の非常に高尚で美しい」学芸である²²⁾。後者は、「はっきりした証明または非常に十分な証拠をもつことができる」学芸である²³⁾。そして、各々の学芸がどのように世間と向き合い、接しているかがこの個所で描かれている。

スミスは前者に属する人々がどのように自らの評価を獲得するかを次のように述べる。「彼の友人たちおよび公衆の、好意的な判断ほど、彼を大いに喜ばせるものはないし、その反対のことも、彼をひどく落胆させるものはない。彼が自分の業績について持ちたいと切望している好評を、一方は確立し、他方はぐらつかせるのである。経験と成功が結局、自分の判断についての少し多くの確信を、彼に与えるであろう。」²⁴⁾では、後者における自らの評価と世間の反応から彼らが受ける影響とはどのようなものであろうか。スミスは知己の数学者ロバート・シムンヤマシュウ・ステュワートの名を挙げ、さらには偉大な自然哲学者としてニュートンの名をも挙げる。「数学者達は、彼らの発見の真実性と重要性との双方について、最も完全な保証を持つことができるのであって、彼らはしばしば、公衆が彼らに示しうる受け入れ方に対して、非常に無関心である」²⁵⁾ことや、「彼らの最も価値ある仕事のうち何かが、公衆の無知によって注目されずに受け取られたことから、最小の不安さを感じるようには決して思われなかった」²⁶⁾とした。ニュートンにおいても自らの『自然哲学の数学的原理』が何年にも亘って世間から無視されていたにもかかわらず、彼は平静さを失わなかったとしている。「確実性と平静さ」を保つ自然哲学者の自らへの確信が世間からの独立性と派閥形成からの解放をスミスは「態度の最も愛すべき単純さを持った人々」と称して、好意を表しているといえる²⁷⁾。

自然哲学者達は、ひとつの結合原理を自らの体系として構想することによって、そのことは自らの発見と発想への確信、すなわち他者に左右されない自然（神の存在証明）の真実であるという確信となった。ところが、人文社会系哲学者（道徳哲

学者も含む)達は、人間行為原理と社会形成原理を探ろうとするが、社会機構の一構成要素である人間という対象自体が自らをも包摂することとなる。そのことは緊密な相互的影響性の下に個々人が置かれることを意味するのであるから、自らの仕事や作品(思索を含む)に対しての評価は、他者の反応として決して排除できるものではないであろう。上述を鑑みれば、当然、道徳哲学の諸体系・原理は社会共同体の中に属し、人間本性を必然的に基盤とするものとなろう。

確かに、ヒュームもスミスも自然哲学的分析に真理の存在を見ていたことは明らかであると思われる。ヒュームは明確に道徳哲学の中に「観念の曖昧さと用語の不明瞭さ」の打破を唱っていた。一方、スミスもすでに概観したように、真理探究における構想=哲学体系の性質が異なることを提示することとなった。では、次にわずかなりともケインズが提示する人間本性観を眺めることで、モラル・サイエンスの性格を検討しよう。

3. ケインズの視点——『確率論』と『一般理論』

ケインズは『確率論』第4部第26章「確率の行為への適用」において、確率の理論と近代倫理学との最初の出会いを、イエズス会の蓋然主義の説教にみている。これは、教会における懺悔への問答集として成立した経緯をもつ。これこそスミスも『道徳感情論』の中で批判対象として取り上げた「決疑論」である。このテーマについては後に触れる。

さて、ケインズは、バトラーの『類比』の序文の文章、「われわれにとって確率はまさに人生の導き手である」を提示することによって、それが後の功利主義倫理学の発達を促した旨、議論を展開している²⁸⁾。統計的手法、すなわち、確率がわれわれの行為原理となったといえよう。ケインズは、われわれの努力がもたらす諸結果は大いに不確かなものであるにも拘らず、「どの部分であれ、ある部分におけるより大きい善は、それに反する証拠がない場合には、その部分のより小さい善よりも、全体におけるより大きい善を確からしいものにするという仮定」、すなわち、「部分の善は全体の善に対して都合のよい関連をもつと仮定」されることによって選択されるとしている²⁹⁾。さらに、ケインズは、「今日の標準的な倫理学」が以下の仮定を設定していることに疑いを向ける。第1に、善の度合は数値的に測定可能であり、算術的に加算できる。第2に、確率の度合もまた数値的に測定可能である。この「数学的期待値(Mathematical expectation)」が賭博やゲームの科学研究と同じ領域に存在していると指摘する。そして、彼は「数学的期待値」がわれわれの行動の選好度の尺度となることに異論を呈している。端的なケインズの見解は、「善あるいは有利性の「数学的期待値」が、つねに数値的に測定可能であるとは限らないことが導かれる」ところに表れている³⁰⁾。

しかしながら、確率の基礎となる「情報の完全さの度合」³¹⁾は行為の実際の決定に関連していることをケインズは指摘するとともに、選択した行動の反対の結果——「危険」——をもわれわれは斟酌すべきことも述べている。上述の前者に関わ

る叙述として、「わずかな証拠にもとづいてその確率が決定されうるにすぎない善と、見込みがより完全な知識の上に基礎づけられている他の善とを、ただ確率の大きさだけによって比較できるかどうか」、後者の叙述として、「限界的な場合には、確率の係数のみではなく、重みと危険の係数も結論に関連をもつ、その他の場合にも、それらの係数はなんらかの影響を及ぼすと考えても当然である」ことをケインズは示している³²⁾。とはいえ、ケインズは、「私はコンドルセもしくはエッジワースのように、「代数学の光で、倫理学、政治学を照らす」という楽観的希望をもっていない」と語る³³⁾。また、彼は「確率は終始確率である」と強調することによって、次の見解を示す。「確率が高いからという理由からなされる科学的研究は、概して誤りに導くよりは真理に導くであろうということは、せいぜい確からしいことにすぎない。最も確からしい考察に導かれた行動路線は、一般に成功にいたるであろうという命題は、確実に真であるわけではなく、それを良しとするものは、その確率以外にはない。」

ケインズは、結論的に、「確率の重要性」に合理的な側面がみられること、また実用面において行為するときの一つの考慮すべき材料——「人生の導き手」——であることを述べている³⁴⁾。

では、『雇用、利子および貨幣の一般理論』における経済行為を心理的要素から分析する第12章「長期期待の状態」から、前述の『確率論』の内容を踏まえながら、人間の行動原理を概観してみよう。

資本の将来収益についての心理的期待について、ケインズは、「期待を形成するさいにたいそう不確実な事柄に重きをおき過ぎるのは愚かなことである。だからたいはいは多少なりとも確信をもっている事実を案内役にするのであるが、当面の問題への決定的な関連性について乏しいとしても、あながち不条理とはいえない。ここから、現状の状況に関する知識は、ある意味では不相応の比重で、長期期待の形成に入って来るのである」と述べ、この行為、動機形成が「通常の慣行」であるとす³⁵⁾。

ケインズは、われわれの「意思決定の基礎となる長期期待の状態はわれわれのなしうる最も蓋然性の高い予測のみに依存するのではない」³⁶⁾として、すでに確認したように確率の不確かさの中にわれわれが存在していることを提示する記述が登場する。「最善の予測と思われていたものが全くの誤りに帰すかもしれないという可能性をわれわれがどの程度に評価しているかということにも依存している。」³⁷⁾このような経済的世界における収益への期待は、多くの場合実務家と呼ばれる人々が持ち、その期待への「確信の状態 (the state of confidence)」への考察を経済学者が怠っていた旨³⁸⁾、ケインズは指摘する。

果たして期待収益への予測が依拠する知識の根拠が正確であったかという否である。ケインズは、昔の企業者、すなわち証券市場が存在しない古典的企業観に依拠する時代は、「事業が最後にどのような結末を迎えるかは概して経営者の才覚と気骨の問題」であったとし、「事業は富くじとしての一面」をもっていたことを述べる³⁹⁾。しかし、今日では証券市場が登場し、その市場の中で多くの投資物件が

再評価される環境を提供してくれ、本来は投資物件の個人間での移転を容易にする役割から、現在はまさに投機の間になったことをケインズは指摘する⁴⁰⁾。彼の次の言葉がわれわれに「投機による不安定性」と「人間性の特徴にもとづく不安定性 (the instability due to the characteristic of human nature)」⁴¹⁾ 考察への導き手となってくれる。「ある部類の投資は、その道に長じた企業者の本来の期待によるよりは、むしろ証券取引所で売買を行う人たちの、株価に表れる平均的な期待に支配されることなる。」⁴²⁾

ケインズは、「この慣習の本質 (the essence of this convention)」⁴³⁾ として、事態の変化がない限りわれわれはそれを保持するとする。すなわち、市場において、「知識が数学的期待を計算するための十分な基礎とはなりえない」し、関わりのない種類の事柄が市場評価には含まれる旨⁴⁴⁾、彼は指摘する。とはいえ、このような「慣習的計算方法 (the conventional method of calculation)」が私たちの事業に「相当程度の連続性と安定性」を与えているとする⁴⁵⁾。そして、「慣習の不安定性を高める要因」として、とくに市場の群集心理を挙げている⁴⁶⁾。(ここでは、美人コンテストやアメリカの投資家の例を提示している。)

「投機による不安定性のほかにも、人間性の特徴にもとづく不安定性、すなわち、われわれの積極的活動の大部分は、道徳的なものであれ、快楽的なものであれ、あるいは経済的なものであれ、とにかく数学的期待値のごとくに依存するよりは、むしろおのずと湧きあがる楽観に左右されるという事実に起因する不安定性がある」⁴⁷⁾ というケインズの見解の中に、「確率の重要性」への猜疑、つまり「数学的期待値」へのある程度の批判を看取できる。その直後に、周知の通り、経済活動における「血気 (animal spirits)」が登場する。ケインズは、次のように述べることで、「数学的期待値」への懐疑を顕わにする。

「企業活動が将来利得の正確な計算にもとづくものでないのは、南極探検の場合と大差ない。こうして、もし血気が衰え、人間本来の楽観が萎えしぼんで、数学的期待値に頼るほかわれわれに途がないとしたら、企業活動は色あせ、やがて死滅してしまうであろう。」⁴⁸⁾

ここで、この章では結論としてマクロ的政策——金融政策——の必要性を主張する個所⁴⁹⁾ が提示されるわけであるが、彼のひとつの人間本性観がはっきりと描かれている。

「すなわち、将来に影響を及ぼす人間の決意は、それが個人的な決意であれ、政治的・経済的な決意であれ、厳密な数学的期待値に依拠することはない。なぜならこのような計算を行うための根本原理は存在しないからである。もっといえば、車輪を回転させ続けるのは人間生得の活動衝動であって、われわれの理性的自己は選択肢間で出来るだけうまく選択を行い、可能な場合、計算を行うか、しかしそれも、その動機をたずねてみると、気まぐれ、感情、あるいは偶然に行き当たるのがしばしばだということ、これである。」⁵⁰⁾

ケインズの初期の『確率論』から『雇用、利子および貨幣の一般論』に流れる根底としての人間行為に関わる視点は上述でたどったように、共通するものを見つけ

ることができる。それは、不確実性の下で蓋然的に確信に従う個人であり、「数学的期待値」に必ずしも従わない人間の姿が想起される。このような人間社会を抱えた経済学を、ケインズが「経済学は抽象的な演繹的な体系ではなく、人間の社会的な幸福の一つの側面に関わる科学」として自覚していたことは明らかであろう。

結びにかえて

ヒュームにおける道徳諸科学の「観念の曖昧さと用語の不明瞭さ」を解決するために提示された道は、ニュートンの思考方法へ依拠することによって、自然哲学的に人間の行為をも普遍的原理とする方向性へ舵を切るものとして解することができる。また、スミスにおける哲学体系把握は、「空想の中で結合するために考案される想像上の機械」であるが、それは現実の現象が加味されることによって「最も普遍的な帝国」の獲得を意味するものとなった。しかしながら、スミスの道徳哲学と自然哲学に従事する人間比較において、われわれは、前者に関わる者が他者評価から自らの結果を獲得するのに、後者に関わる者は世間から超然として、真理探究への確信を得ていることを確認した。そのことは社会的行為の不確実性を表しているものとも理解できよう。では、時代は異なるが、ケインズはどのように人間社会を眺めたかといえ、終始、「数学的期待値」＝「確率の重要性」への懐疑の眼を向けていたといえる。そのことはすでに紹介したが次の文章にあった。「将来に影響を及ぼす人間の決意は、それが個人的な決意であれ、政治的・経済的な決意であれ、厳密な数学的期待値に依拠することはありえない」のである。

では、スミスの決疑論批判の個所を提示する時が来た。スミスは『道徳感情論』初版第6部「道徳哲学の諸体系について」第4編「さまざまな著者たちが、道徳性の実際的な諸規則を取り扱ってきたそのやり方について」の第2群の道徳学者として決疑論者への批判を展開する個所がある。スミスは、はじめに自然法学者との比較から「法学の目的は、裁判官および裁決者のために、諸規則をあらかじめ定めること」であり、一方、「決疑論の目的は、善良な人の行動のために、諸規則をあらかじめ定めること」であると提示する⁵¹⁾。前者は法学的根拠を普遍的なものとすることは理解できるが、後者、決疑論では、本来、「人類の普通の諸感情に従って考察する」ことに対して、厳密な一般諸規則によって行為に正当性を持たせることに腐心している旨⁵²⁾、スミスは決疑論的行為原理への批判を行う。「決疑論者の諸著作については、一般に気分と感情だけが判断すべきものを、正確な諸規則によって指導しようと役に立たない企てをしたとっていいであろう。あらゆる場合に、繊細な正義の感覚が良心のとるに足りぬ薄弱なこまかさに陥り始める厳密な点を、諸規則によって確定することがどうして可能であろうか。」⁵³⁾（スミスはまた、『道徳感情論』と『国富論』の2著を通して、効用批判、重商主義批判、「体系の人」批判、ストア哲学批判を行っていることも合わせて検討しなければならない⁵⁴⁾。）

このスミスの決疑論批判はケインズの『確率論』から提示されていた「数学的期待値」と同根の思想を宿してはいまいか。人間の様々な行為決定要因がいかに不確

定的で曖昧なものか、しかし、また、そのことが経済社会をダイナミックに動かしていくエネルギーとなっているか。だからこそ、経済学は純粋な自然科学の分野に属さず、「モラル・サイエンス」であるという位置づけを与えられる根拠となっているのではなからうか。今後は、より詳細にスミスとケインズの根底的思想をイギリスという土壌も含めて、両者が「自然的自由の体系」を現代のわれわれに提示しようとしていた姿を抽出するよう努めたい。

注

- 1) Charles R. McCann, Jr. ed. *John Maynard Keynes: Critical Responses*, London: Routledge, 1998, vol. 4, *Obituaries and Final Assessments*. 伊藤邦武氏『ケインズの哲学』（岩波書店、2011年）に1946年7月の哲学雑誌『マインド』（*Mind*, vol. 55, no. 219）に掲載された追悼文の全文（4-8頁）が紹介されている。
- 2) *The Collected Writings of John Maynard Keynes*, London: Macmillan and Cambridge University Press, 1971-89, Vol. 14, pp. 296-7. (以後、ケインズのテキスト引用は『全集』により、keynes, XIV, p. と記す。また、邦訳がある場合、『全集』より掲載箇所を記す。)
- 3) 伊藤邦武『ケインズの哲学』岩波書店、2011年。同氏の著書、さらには、小畑二郎『ケインズの思想』（慶応義塾大学出版会、2007年）には、ケインズの思想を考える上で多くの示唆をいただいた。今後、経済倫理思想の考察への導き手としたい。
- 4) 伊藤邦武、同書、204頁。
- 5) *Enquiries concerning Human Understanding and concerning the Principles of Morals* by David Hume, ed. by L. A. Selby-Bigge, Third edition by P. H. Nidditch, Oxford University Press, 1975, p. 312. 『道徳原理の研究』渡部峻明訳、哲書房、1993年、190頁。(以後、Hume, EHU, EPM と記す。) また、ケインズにとって、ヒューム哲学体系への関心は自らの克服すべき対象であり、ケインズの初期の『確率論』でも多くの個所で言及している。また、周知のとおり、『社会・政治・文学論集』（Keynes, xxviii, pp. 373-90. 邦訳508-31頁）第4章「ヒューム」では、スミスのものとみなされた『人間本性論』の摘要がヒューム自らのものであることを明らかにした。
- 6) Hume, EPM, p. 322. 邦訳202-3頁。
- 7) *Ibid.*
- 8) Hume, EHU, pp. 60-1. 『人間知性の研究・情念論』渡部峻明訳、哲書房、1990年、87-8頁。
- 9) Hume, EHU, p. 89. 邦訳61-2頁。
- 10) Hume, EHU, pp. 48-9. 邦訳72頁。
- 11) *A Treatise of Human Nature* by David Hume, ed. by L. A. Selby-Bigge, Second edition by P. H. Nidditch, Oxford University Press, 1978. Intro.xvii. 『人性論』大槻春彦訳、岩波文庫、1951年、23-4頁。
- 12) Hume, EPM, p. 204. 邦訳46頁。
- 13) Adam Smith, *Essays on Philosophical Subjects*. (以後、EPS と記す。) The Glasgow Edition ed. by W. P. D. Wightman and J. C. Bryce, 1976, pp. 37-8. 『アダム・スミス哲学論文集』水田洋他訳、名古屋大学出版会、1993年、14頁。
- 14) Smith, EPS, p. 39. 邦訳16頁。
- 15) *Ibid.*, p. 45. 邦訳25頁。(〔 〕内は引用者。)
- 16) *Ibid.*, pp. 45-6. 邦訳26頁。
- 17) Adam Smith, *An Inquiry into the Nature and Causes of the Wealth of Nations*, The Glasgow Edition ed. by R. H. Campbell and A. S. Skinner; textual editor W. B. Todd, 1976, p. 21. 『国富論』水田洋監訳、杉山忠平訳、岩波文庫、32-3頁。
- 18) Smith, EPS, p. 66. 邦訳51頁。
- 19) *Ibid.*
- 20) Smith, EPS, p. 92. 邦訳85-6頁。
- 21) Smith, EPS, p. 105. 邦訳102-3頁。ケインズはニュートンの研究を行っており、それは、『人物評伝』（Keynes, x, pp. 363-73. 邦訳479-501頁）第10章「人間ニュートン」で詳しく語っている。
- 22) Adam Smith, *The Theory of Moral Sentiments* (以後、TMS と記す。), The Glasgow Edition ed. by D. D. Raphael and A. L. Macfie, 1976, pp. 123-4. 『道徳感情論』水田洋訳、筑摩書房、1973年、243-4頁。

- 23) *Ibid.*, p. 124. 邦訳244頁。
 24) *Ibid.*, p. 123. 邦訳243頁。
 25) *Ibid.*, p. 124. 邦訳244頁。
 26) *Ibid.*
 27) *Ibid.*, p. 124-5. 邦訳244-5頁。
 28) keynes, VIII, p. 341. 邦訳357頁。
 29) keynes, VIII, p. 342-3. 邦訳359頁。
 30) keynes, VIII, p. 344. 邦訳361頁。
 31) keynes, VIII, p. 345. 邦訳362頁。
 32) keynes, VIII, p. 347. 邦訳364頁。
 33) keynes, VIII, p. 349. 邦訳366頁。
 34) keynes, VIII, p. 356. 邦訳373頁。
 35) keynes, VII, p. 148. 邦訳146頁。また、合わせて、『雇用、利子および貨幣の一般理論』（上）
 間宮陽介訳、岩波文庫、2008年、203頁。（以後、間宮訳の頁数を『全集』訳の後に記す。）
 36) keynes, *ibid.*
 37) keynes, *ibid.* 間宮訳204頁。
 38) keynes, VII, pp. 148-9. 邦訳146-7頁。間宮訳204頁。
 39) keynes, VII, p. 150. 邦訳148頁。間宮訳206頁。
 40) keynes, VII, pp. 150-1. 邦訳148-9頁。間宮訳207頁。
 41) keynes, VII, p. 161. 邦訳159頁。間宮訳223頁。
 42) keynes, VII, p. 151. 邦訳149頁。間宮訳208頁。
 43) keynes, VII, p. 152. 邦訳150頁。間宮訳209頁。
 44) keynes, *ibid.* 間宮訳210頁。
 45) keynes, *ibid.*
 46) keynes, VII, pp. 153-8. 邦訳151-6頁。間宮訳211-9頁。
 47) keynes, VII, p. 161. 邦訳159頁。間宮訳223頁。
 48) keynes, VII, p. 162. 邦訳160頁。間宮訳224頁。
 49) keynes, VII, p. 163-4. 邦訳161-2頁。間宮訳226-8頁。
 50) keynes, VII, p. 162-3. 邦訳161頁。間宮訳225-6頁。
 51) Smith, TMS, p. 330. 邦訳421頁。
 52) *Ibid.*, pp. 330-1. 邦訳422-3頁。
 53) *Ibid.*, p. 339. 邦訳431頁。
 54) スミスの5つの批判対象への考察は、拙論『アダム・スミスの「自然的自由」再考』関東学院大学研究論集『経済系』第206集、2001年を参照されたい。また、決疑論批判と重商主義政策批判の関連性は、「アダム・スミスの「自然的自由」の所在——経済と道徳を結ぶ源泉思想」、三村・澤・香川・矢嶋編著『交通と文化の史的融合』八千代出版、2002年を参照されたい。

執筆者紹介

伊藤 哲 麗澤大学・フェリス女学院大学・関東学院大学非常勤講師。関東学院大学大学院経済学研究科博士課程修了・博士（経済学）。英国グラスゴウ大学大学院人文学部哲学科 Dip. Pro. Phil 取得。『アダム・スミスの自由経済倫理観』（八千代出版、2000年）、『「見えざる」社会——想像力の真価とアダム・スミス』（八千代出版、2010年）等。

